



今必要な人間関係

行き詰まった時、先人の名言に救われることがある。先日、県内の子ども達の体験活動を実施するために集まった中高生青年ボランティアたちと話し合った時もそうだった。

小学生をまとめるにはどうすれば良いだろうか。白熱する議論の中で思い浮かんだのが、山本五十六という人が言った「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」という言葉だ。

今でもオフィスなどに掲示してあるのを見かける。たしかに、この後に続く「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず」も合わせると、まさに人間関係の真理であり、心が通った理想のパートナーを想像することができる。

しかし、なぜこの言葉が今でも人材育成論として語り継がれるのだら

うか。私なりに考えてみた。ご承知の通り、山本は戦時下の軍人であったことに大きなヒントが隠されている気がする。当時は不条理や理不尽がまかり通る時代だったであろう。その状況下で一番強制力が強かった軍人の一人である山本が残した言葉という点に、この名言の魅力があるのではないかと。規律と称して半ば強制的にチームを編成することもできる人間が、それに頼らない人材育成と心が行き交う人間関係を説いたからこそ、名言として今も語り継がれるのだと思う。

山本が説いた方法を実践するとなれば、確かに容易ではない。効率的でないかもしれない。しかし、人が生きていくための貴重な経験や体験を未来創造の学びとする中で、効率性の優先順位は1番ではないのだ。

人間関係の構築も同様、時間をかけてできた信頼はより強固なものになる。オンラインを活用する今の時代だからこそ、一見、非効率に思える一分一秒を大切にしたい、心が行き交う人間関係を育てたい。

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。